

平成二十七年六月十日発行  
皇學館論叢第四十八卷第三号 抜刷

近代に発明された万葉集の声調様式「波動」

田  
中  
教  
子

## 近代に発明された万葉集の声調様式「波動」

田 中 教 子

## □ 要 旨

斎藤茂吉に代表される近代「アララギ」の万葉集研究は、「声調」を科学的に説明しようとしたところに特徴があった。これまで「声調」は難解で恣意的なものと考えられてきた。だが、茂吉は「声調」の様式を「波動」「屈折」「圧搾」「顫動」「ゆらぎ」などの物理学用語で分類している。この分類意識に注目し、詳細に見てゆくことにより、「声調」の解明にちかづけるのではないかと考え、今回は「波動」について論じたい。

「波動」は、古くは仏典や杜牧の詩などの漢籍およびその類書『藝文類聚』のなかに見える語であったが、明治に

入って物理学の用語として一般化する。文学作品では『新体詩抄』の序文をはじめ、北村透谷、夏目漱石や森鷗外らも「波動」を用いた。和歌の批評では、伊藤左千夫が万葉集の評価語として「波動」を用いる（『アララギ』一九一〇年一月号）。以降、左千夫の影響がアララギに継承され、島木赤彦が声調の様式のひとつとして「波動」を打ち出す。つづいて斎藤茂吉は、『柿本人麿』に十八例（九首）、『万葉秀歌』に五例（四首）の「波動」を用いる。

茂吉は、赤彦の「波動」をヒントに、独自に、意味と音とが一体の「波動」を考える。茂吉は、人麻呂の長歌に代表される音の連続、対句の繰り返しを波に喩える。また静

止、省略などに波のうねり、音のたかなりを物理学の「波動」をもって比喩的にあらわしていると見られる。茂吉は「声調」を意味と音が一体化したものと捉え、ここに独自の分析をもって万葉集の声調の美を捉えようとした。これは、かならずしも成功しているとは言えないが、万葉集の美を科学しようとした近代の万葉集研究の一つの試みであつたと言える。

□ キーワード

斎藤茂吉 万葉集 声調 物理的用語 波動

一、はじめに

斎藤茂吉に代表される近代「アララギ」の万葉集研究には、声調を科学的に分析しようとする試みがあつた。五味保義は次のように言う。

聲調といふことについて、科學的に証そうとし、論として樹てた所に茂吉の面目があり、吾々の心眼をあらたならしめる所のものである。

〔「聲調」といふ言葉〕「アララギ」一九六三年四月号

この五味保義の言葉は、当時のアララギ会員の自負をよくあら

近代に發明された万葉集の声調様式「波動」(田中)

わしている。彼らは、斎藤茂吉が声調を科学的に分析し得たとらえていた。

実際に茂吉が声調を科学的に分析し得たかどうかは別にし、科学的分析を行おうとしたことは確かである。茂吉は「意味を常に考えに入れながら音の要素について吟味して行くやうにせねばならない」(「万葉短歌声調論」)<sup>(注2)</sup>と言ひ、声調論(「短歌に於ける四三調の結句」「万葉短歌声調論」など)を展開し、いずれも万葉集を重んじ、万葉集から実作の方法を学ぼうとするところがあつた。さらに、茂吉は、万葉集の注釈書として「柿本人麿」『万葉秀歌』<sup>(注3)</sup>をあらわすが、その中に声調の様式のひとつを「波動」という語であらわしている。「波動」は、アララギ系の短歌の批評用語として現在もしばしば用いられるが、いまだ詳しく論じられたものはない。<sup>(注4)</sup>本稿は、茂吉の「波動」がどこからもたらされたものか、またどのように意義づけしているかを考えたい。近代の声調という難解な概念を理解する一つの手がかりとして、この「波動」の意義を説明することが有効性を持つと考えられる。

## 二、茂吉の歌論に用いられるまでの、

### 用語としての「波動」

「波動」の歴史を遡ると、古くは仏典や杜牧の詩などの漢籍、およびその類書『藝文類聚』のなかに見える。<sup>(注5)</sup>その後、こうした分野以外には長らく用いられず、明治になって興る近代科学の先駆をなした江戸時代の蘭学の書の中の物理学関係を扱ったものでもまだ「波動」は使われていない。しかるに明治に入ると物理学の用語として多用されるようになる。

一八七二年、明治政府により学制が制定されると、欧米の新知識である物理に注目があつまり、窮理ブームがおこる。そうした時代の中で小中学校、師範学校の教科書として編纂された『物理階梯』(一八七四年)<sup>(注7)</sup>は、明治前半期にもっともよく読まれた物理書であった。しかし、同書には、まだ「波動」の使用はなく、同時期にやや遅れて出版された『小学物理学』<sup>(注8)</sup>の上巻「第二十章音學」に至って、

夫レ響體ノ音ヲ發スルニ方リ顫動スレハ其顫動ヲ周圍ノ空氣ニ伝ヘコノ一層ノ空氣顫動シ之ヲ他ノ一層ノ空氣ニ伝ヘ終ニ来テ我耳ニ入ルスノ如ク空氣ノ動クヤ恰モ石ヲ水面ニ投スレハ水面輪漣シ波動ヲ起スカ如シ

(※傍線筆者)

と「波動」が比喩的に用いられる。ただ、この段階では「波動」は、まだ物理学用語とは言えなかった。三年後の一八七七年、師範学校の物理の教科書『萬有七科理学』<sup>(注9)</sup>に「波動論」という言葉が見える。同じ項目に「反射」「屈折」とあるところからこれは光の波動と見られる。一八七九年の『改正物理全志』<sup>(注10)</sup>では、「光の性質及び其根元」として、「波動説」ではなく「波及説」とされている。『改正物理全志』と同年に発刊された『物理学』<sup>(注11)</sup>では、目次に「波動総論」があり、「水ノ波動」「繩索ノ波動」「音響ノ波動」「音ノ振動数並ニ波動ノ長径ヲ知ルノ法」(二處ニ定住スル所ノ大氣ノ波動)がある。また当時、グラハム・ベルによって電話機が発明され、その実験に立ち会ったとされている岩倉使節団の小宮山弘道が一八八〇年出版した『近世二大發明伝話機蘇言機』<sup>(注12)</sup>に音の「波動」が見える。翌一八八一年出版の東京帝国大学の物理教科書『士都華氏物理学』<sup>(注13)</sup>に「波動」が見える。この波動は振子と音の波動である。一八九二年の『普通物理学』<sup>(注14)</sup>に光の波動説という言葉が見える。ちなみに当時はまだエーテルの存在が信じられており、光の波動説はエーテルを媒介物としていると説いている。一八九三年の『物理学原論』<sup>(注15)</sup>はエーテルの波動を言い、「近世物理学」<sup>(注16)</sup>は、光と音を波動で説明している。一八九七年に出版された『医学生受驗用物理学』<sup>(注17)</sup>は、水にも「波動」を用いる。このように明

治期には物理学用語としての「波動」は、光、音、電気、水、空気などの説明に、使用されはじめる。時期は遅れるが、波動は、さらに物理学の枠を越えてさまざまに使われるようになり、一般化してくる。

### 三、明治期の文学作品にあらわれた「波動」

前節にみた物理学用語が一般化するにおよんで「波動」は文学の分野でももちいられる。はやく一八八二年、『新体詩抄』<sup>(注18)</sup>の序文には「光線波動ノ説」なる表現が用いられる。この文には実態の説明はなく、新時代を象徴する輝かしい知識のひとつとして名称のみが紹介される。

一八九四年になると、北村透谷は遺作となつた『エマルソン』<sup>(注19)</sup>に次のように述べる。

彼は一切の事情を以て、一切の「自然」を以て、一切色界の現象を以て、無限の心靈の反映と認めたり。

之を以て、彼の前に狂乱吼ゆるとも、彼の後に懸崖倒る、とも、彼は之を以て畏怖すべき者と思はざるなり。無常流転は彼れ之を知れり、生死遷滅は彼れ之を知れり、然れども彼は之を表面の小波動として知れり、彼は萬物の奥に不退轉の靈あるを認めて之を信じて動かず。(※傍線筆者)

近代に発明された万葉集の声調様式「波動」(田中)

北村透谷の著したこの『エマルソン』には、科学的用語が多用されており、「小波動」は物理学用語の転用と見られる。「小波動」は、「不退轉の靈」から見れば「生死遷滅」は些細なできごとにすぎないという比喩である。こうした『エマルソン』における科学用語の多用は、北村透谷の言語感覚というよりも、エマーソンの『The Over Soul』(一八四一年)などに科学用語が用られていたことからの影響と見られる。

こののち、夏目漱石や森鷗外も「波動」を用いる。一九〇五年『吾輩は猫である』、一九〇五年『幻影の楯』の「波動」は影響の意味である。鷗外の一九〇九年『仮名遣意見』、一九一年『カズイスタカ』も影響の意で用いているが、一九〇九年『キタ・セクスアリス』になると物理学的な用語としての「波動」を用いる。物理学書以外に見られるこれらの「波動」の用法は次のように分類される。

① 波……『米欧回覧実記』<sup>(注20)</sup>

② 物理学用語……『エマルソン』、<sup>(注19)</sup>

『キタ・セクスアリス』<sup>(注21)</sup>

③ 物事への影響……『吾輩は猫である』、『幻影の楯』<sup>(注22)</sup>

『仮名遣意見』、『カズイスタカ』<sup>(注23)</sup>

こうした明治の文学作品にみえる三つの用い方のうち、伊藤左千夫が『萬葉集新釋』に用いた「波動」は、物理学用語から

万葉集の評価の用語に転用したものと見られるが、そのことについて次節以降で考えてみたい。

#### 四、万葉集の評価語「波動」から声調様式の「波動」へ

##### 四―一、伊藤左千夫の「波動」

伊藤左千夫の『萬葉集新釋』は一九〇四年より雑誌「アララギ」に連載が開始され、一九一〇年一月に額田王の三輪山の歌（巻一・十七）

うまさけ、みわの山、青丹よし、奈良の山の、山の間ゆ、  
いかくるまで、道のくま、いつもるまでに、つばらかにも、  
見つ、ゆかむを、しば／＼も、見さかむ山を、心なく、雲  
乃、隠さふべしや

をとりあげている。この歌について伊藤左千夫は次のように言う。（傍線引用者、以下同じ）

第五句以下は層々として寄せ返す波の如くに、情緒の波動を勢に任せて、一句は一句より強く「心無く」「雲の隠さふべしや」と熱情の極、雲にも山にも命令せん許りに叫破して居るのである。

このなかで伊藤左千夫のいう「情緒の波動」とは、情緒から

起るエネルギーの高ぶりが連続して現れ、ついつつゆくものを表していると考えられる。左千夫は、目に見えないエネルギーによって第五句以下が「一句は一句より強く」なり、ついには「熱情の極」となるといふ。第五句以下とは「山の間ゆ、いかくるまで、道のくま、いつもるまでに、つばらかにも、見つ、ゆかむを、しば／＼も、見さかむ山を、心なく、雲乃、隠さふべしや」という部分である。「一句は一句より強く」は、「いかくる」「いつもる」の強意の接続語「い」音の響き、「やま」「間（ま）」「まで」「みちのくま」「まで」の「ま」音の連続と句切れのなさをさしている。こうした表現方法を「波動」と呼んだのである。この「波動」が用いられた背景には時代的要求があった。伊藤左千夫は、窮理の用語を用いて万葉集を評価する斬新な試みを行ったのであろう。伊藤左千夫の「波動」は、この後アララギ会員にうけつがれてゆく。<sup>(注26)</sup>

##### 四―二、島木赤彦の「波動」

島木赤彦は、『萬葉集の鑑賞及び其批評』<sup>(注27)</sup>に二例（二首）、『歌道小見』<sup>(注28)</sup>に三例（一首）「波動」を用いている。『萬葉集の鑑賞及び其批評』に「波動」とする歌は巻一・七四と巻三・四一六の歌である。巻一・七四番歌、

三吉野の山の嵐の寒けくにはたや今夜も我が獨寝む  
について赤彦は次のように言う。

此歌全體に意と調と暢達して居り、中へ「はたや」といふ詞が入つて一首の調べに波動を生ぜしめてゐるあたり、味はうて盡きざる情がある。

ここで赤彦は、「はたや」という詞が入つたことにより一首の調べに波動が生じたとして居る。一首は、初句より「三吉野の」「山の」「嵐の」と「の」がくりかえしとなつて居る。「寒けく」で切れ、「はたや」の「や」で休止を置き、結句に思いが集約されている。赤彦は、これを「波動」と呼ぶ。感情の激する時、口から弾き出される詞の多くが断絶するのが自然である。<sup>(注29)</sup> という赤彦は、この歌の切れも寂しくてならない感情の昂りの結果が凝縮していると受け止めるのである。

### 卷三・四一六の歌、

百づたふ盤余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ  
について、赤彦は次のように評価する。

この歌に現れてゐるのは死の度しきである。度しさに徹して初めて歌の哀れさがあるのである。「今日のみ見てや」の「や」が全體に與ふる調子の波動に注意せんことを望む。ここで赤彦は第四句の「や」に注目し、「や」に歌全体へ影響を及ぼす「波動」があるとしている。歌は、初句から第四句

近代に發明された万葉集の声調様式「波動」(田中)

まで区切れなく続き、第四句「今日のみ見てや」で一旦切れて居る。この世を去らなければならぬ悲痛の情が激した結果、第四句「や」で声が途切れ、一呼吸おいたのち、結句に心の叫びが集約される。これを「波動」と呼ぶ。赤彦の「波動」は、左千夫の声調評価の「波動」を一歩すすめ様式をもつことを示唆している。こうした赤彦の「波動」のとらえかたは、後述するように後の茂吉に影響を与えた。

だが、赤彦は、「歌道小見」においては、万葉集の讚美の言葉としても「波動」を用いてゐる。額田王の卷一・二〇番歌、茜根刺紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振るにたいして、赤彦は次のように言う。

激情的なるべきに激情の波動を傳へ、慎ましくひそかなるべきに慎ましくひそかなる波動を傳ふるに於て歌の生命はじめて活躍す。額田女王の御歌の如き萬葉集中に存するもの悉くこれ生命の波動ならざるはなし。之は額田女王の御歌に對して奉るべき評語にして同時に又萬葉集二十卷の歌すべてに推し得べきの評語なりとす。

ここで赤彦は、卷一・十七番歌の三輪山の歌を「激情的波動」、卷一・二〇の蒲生野の狩りの歌を「慎ましくひそかなる波動」としている。「波動」は、一概に激しい感情のみをいうものではなく、ひそかなる思いを伝える場合にも使い得る言

葉であることを示している。額田王の「御歌の如き萬葉集中に存するもの悉くこれ生命の波動ならざるはなし」とし、さらに万葉集二十巻の歌すべてに「推し得べきの評語なり」としている。つまり『歌道小見』における赤彦の「波動」は、万葉集そのものを高く評価する讚美の言葉として用いるにいたった。

このように、島木赤彦は「波動」に、万葉集の歌に認められる情感の表現様式をいうものと、全体への讚美の二つの意味を与え、斎藤茂吉は、様式の「波動」のみを受け継ぎ、発展させた。

## 五、斎藤茂吉の「波動」

斎藤茂吉は、「波動」を『柿本人麿』に十八例（九首）、『万葉秀歌』に五例（四首）用いている。以下に、『柿本人麿』と『萬葉秀歌』の「波動」を見てゆきたい。

茂吉が『柿本人麿』のなかで最初に「波動」を用いるのは、総論篇の第四「柿本人麿私見覚書五」の近江荒都歌（巻一・二九）についての文中である。茂吉の近江荒都歌（巻一・二九）の訓は次のとおりである。

玉櫛 畝火の山の 榎原の 日知の御代ゆ【或云、宮よ】  
生れましし 神のことごと 樛の木の いやつぎつぎに

天の下 知ろしめししを【或云、めしけり】 天にみつ  
倭を置きて あをによし 奈良山を越え【或云、そらみつ  
大和を置きあをによし平山越えて】 いかさまに おもほ  
しめせか【或云、おもほしめか】 天離る 夷にはあ  
れど 石走る 淡海の國の ささなみの 大津の宮に 天  
の下 知ろしめしけむ 天皇の 神の尊の 大宮は 此處  
と聞けども 大殿は 此處と言へども 春草の 茂く生ひ  
たる 霞立つ 春日の霧れる【或云、霞立つ 春日か霧れ  
る、夏草か繁くなりぬる】 百礮城の 大宮處 見れば悲  
しも【或云、見ればさぶしも】

この歌に対して茂吉はつぎのように評する。

これなどは、天爾遠波の使ひざまなどは實に達人の境で、その大きな波動をなして音調の進んでゆくさまは心ゆくばかりであり、西洋の詩などと違って連続性であるにも拘はらず、そこに微妙の休止と省略と飛躍と静止と相交錯した變化を保たせながら進行せしめてゐるのはどうしても多力者の爲業である。

タマダスキ ウネビノ ヤマノ カシハラノ ヒジリノ  
ミヨユ でも、初句は『き』で止めて、幾つかの『の』が  
續いたかとおもふと、びしりと、『ゆ』で受けたあたり何  
ともいへないのである。

このように、茂吉はこの歌を「大きな波動」をなして「音調」が「進んでゆく」と言う。「歎火の」「山の」「樞原の」「日知の」「の」の連続の後、「御代ゆ」の「ゆ」の小休止で調べが停滞気味である。(一云の「よ」の場合も同じである)。また、「天の下 知ろしめししを」は切れである(一云の「知らしめしけり」は、よりはつきりとした切れになる)。「神のことごと 樛木の」の「の」連続、また「淡海の國の ささなみの 大津の宮に 天の下 知ろしめしけむ 天皇の 神の尊の」の八回の「の」連続、「春草の 茂く生ひたる 霞立つ 春日の霧る 百磯城の」にみえる三回の「の」の連続は流れるように進む。「省略」は、波が一瞬水面下に消えたかのように見えることをあらわし、この歌では「奈良山を越え」のあとがそれである(一云の「奈良山を越えて」の「て」が添えられた場合では、よりはつきりと省略であることがわかる)。「飛躍」は、一旦消えたかに見えた調べが高く大きくなるように、「いかさまに」が高い響きであるにとらえる。「静止」は、ここでは調べが止まったかに見えることをさす。この歌では「おもほしめせか」がそれにあたる(一云の場合も同様の働きである)。茂吉の「波動」と呼ぶものは、このような調べの細かな分析により、音が波うちながら流れ進んで、最後に結句に力がこもり、意味が集約されるものをいうと考えられる。

近代に発明された万葉集の声調様式「波動」(田中)

また、卷一・三六の「船竝めて朝川渡り舟競ひ夕川わたるこの川の絶ゆることなくこの山のいや高知らす水激る瀧の宮處は見れど飽かぬかも」に、たいして茂吉が「波動」とするのは、「船竝めて朝川渡り」「舟競ひ夕川わたる」の対句表現および「この川の絶ゆることなく」「この山のいや高知らす」の対句的表現である。これらの近似の音と意味のくりかえしに、調べのたかなりがあり、その後、大きな勢いとなって結句に意味が集約するというのである。

#### 卷一・三八番歌の

神ながら 神さびせすと 芳野川 たぎつ河内に 高殿を  
高しりまして 登り立ち 國見をすれば 疊はる 青垣山  
山祇の 奉る御調と 春べは 花かざし持ち 秋立てば  
黄葉かざせり (※訓、斎藤茂吉)

について茂吉は次のように言う。

例へば、『かむながら、かむさびせすと、芳野がは、たぎつかふちに、高殿を高しりまして』あたりでも、これだけの同音の繰返しがあり、『登りたち、國見をすれば、たなはる』、『青垣やま、やまつみの、まつるみつぎと』、『春べは、花かざしもち、秋たてば、黄葉かざせり』あたりでもさうである。

そして、これは一つの波動的連続聲調を成就せむがため

の、自然的技法で、佛教の經典などの技法と好一對なのである。即ち、斯くしなければ連続が好く出来ず、中途で弛んでしまふのである。

こも茂吉は「波動的連續聲調」と言っている。これは、「かむながら」「かむさびせすと」「芳野がは」「たぎつ河内に」「kan」「kan」「gawa」「kawa」の近似の音の連続がある。また、「たぎつかふちに」「高殿を高しりまして」「登りたち 國見をすれば たたなはる」の「ta」「taka」「taka」「ta」「tata」の「ta」および「た」の連続、「青垣やま」「やまつみ」「まつるみつぎや」の「yama」「yama」「ma」「tsumi」「tsumi」と近似の音のくりかえしによつてなされる。「春は、花かざしもち、秋たてば、黄葉かざせり」については「春」の「は」「花」の「は」「かざし」「かざせり」の「か」のくりかえしを言っている。このような繰り返しについて「仏教の經典などの技法と好一對」であるとし、「これは単に短歌声調論からの推論ではなしに、<sup>注30</sup> 記紀萬葉の長歌を一通り見渡しての結論」とする。ここで思い出されるのは、茂吉の第一歌集「赤光」は阿弥陀經のくりかえし部分からの命名である。それは少年時代に聞いたこの經文の同音のくりかえしに音楽性を感じて惹かれたためであった。それと同種の音楽性を茂吉は人麻呂に代表される万葉集の声調に注目していたと見られる。

## 卷一・五二の歌、

やすみしし わご大君 高てらす 日の皇子 龜妙の藤  
井が原に 大御門 始め給ひて 埴安の 堤の上に 在り  
立たし 見し給へば 大和の 青香具山は 日の經の大  
御門に 春山と 繁みさび立てり 畝火の この瑞山は  
日の緯の 大御門に 瑞山と 山さびいます 耳成の 青  
菅山は 背面の 大御門に 宜しなべ 神さび立てり 名  
細し 吉野の山は 影面の 大御門ゆ 雲居にぞ 遠くあ  
りける 高知るや 天の御蔭 天知るや 日の御影の水  
こそは 常しへならめ 御井のま清水 (※調、斎藤茂吉)  
について茂吉は、

そして、その幾何學的構成をあらはすに、『大和の青香具山は日の經の大御門に春山と繁みさび立てり』と云つてゐる。單に青く茂つた香具山を云ふにこれだけの事をいつてゐる。その言語は秀潤豊腴で、單に乾燥した立體といふやうなものでは無い。『畝火のこの瑞山は日の緯の大御門に瑞山と山さびいます』でもさうである。『耳成の青菅山は背面の大御門に宜しなべ神さび立てり』でも、『名ぐはし吉野の山は影面の大御門ゆ雲居にぞ遠くありける』でもさうである。言葉を繰返して調子をとりにつつ、一つの波動形をなしてゐるところは、決して堅い直線的立體的で

は無い。

と言っている。ここでは「青香具山」「春山」「瑞山」「瑞山」「山さび」「青菅山」「吉野の山」の「yama」の連続があり、「日の経」「繁みさび立てり」「神さび立てり」の「sabi」+「fateri」、三回の「大御門に」、「そとも」「かげとも」の「tono」、「よしぬ」「よろし」の「yo」の繰り返しに波のような感覚がある。

卷二・一六七の歌、

天地の 初の時し ひさかたの 天の河原に 八百萬 千  
萬神の 神集ひ 集ひ坐して 神分り 分かりし時に 天  
照らす 日女尊【一に云ふ、さしのほる日女の命】 天を  
ば 知らしめすと 葦原の 瑞穂の國を 天地の 依り合  
ひの極 知らしめす 神の命と 天雲の 八重かき別きて  
【二に云ふ、天雲の八重雲別きて】 神下し 坐せまつり  
し 高照らす 日の皇子は 飛鳥の 淨の宮に 神ながら  
太敷きまして 天皇の 敷きます國と 天の原 岩戸を開  
き 神上り 上り坐しぬ【一に云ふ、神登りいましてししか  
ば】 わが大君 皇子の命の 天の下 知らしめしせば  
春花の 貴からむと 望月の 満はしけむと 天の下【一  
に云ふ、食國】 四方の人の 大船の 思ひ憑みて 天つ  
水 仰ぎて待つに いかさまに 思ほしめせか 由縁もな  
き 眞弓の岡に 宮柱 太敷きまし 御殿を 高知りまし

近代に発明された万葉集の声調様式「波動」(田中)

て 朝ごとに 御言問はさず 日月の 數多くなりぬる  
そこ故に 皇子の宮人 行方知らずも【一に云ふ、さす竹  
の皇子の宮人ゆくへ知らにす】  
（※訓、斎藤茂吉）  
について茂吉は、

それから、「の」や「を」や「て」などの使ひ方が、連続  
的波動的進行の效果をもたらす様に使つてゐて、ぼつりぼ  
つりと切れてゐない。

という。これは、「天地の 初の時し」の「し」が強調である  
とともに小休止である。「天地の 初の時し ひさかたの 天  
の河原に」「葦原の 瑞穂の國を 天地の 依り合ひの極 知  
らしめす 神の命と 天雲の」などの「の」のくりかえし、「集  
ひ坐まして」「天雲の八重かき別けて」「神ながら太敷きまして」  
「高知りまして」の「て」は軽い途切れである。つぎに「ず」  
で流れが一瞬消えたかのようになり、「日月の 數多くなりぬ  
る」で塞き止められて、やがて結句「行方知らずも」に意味と  
音とが集約される。これを「波動」というのであろう。なお、  
一云の場合もほぼ同様の「波動」と見られる。

卷二・一九四番の歌、

飛ぶ鳥の 明日香の河の 上つ瀬に 生ふる玉藻は 下つ  
瀬に 流れ觸らふ 玉藻なす か依りかく依り 靡かひし  
孀の命の たたなづく 柔膚すらを 劔刀 身に副へ寐ね

ば ぬばたまの 夜床も荒るらむ【一に云ふ、かれなむ】

そこ故に 慰めかねて けだしくも 逢ふやと念ひて【一

に云ふ、君もあふやと】 玉垂の をちの大野の 朝露に

玉裳はひづち 夕霧に 衣は沾れて 草枕 旅宿かもある

逢はぬ君ゆゑ

(※訓、斎藤茂吉)

は、「人麿の歌調には、暈があつても、その進行の具合は憶良のものなどに較べると實に朗朗として、振幅の大きい波動をおもはしめる。」とする。これは、「飛ぶ鳥の 明日香の河の」の「の」の音のくりかえし、「生ふる玉藻は」「玉藻なす」の「玉藻」のくりかえし、「か依りかく依り」のくりかえし、「玉藻」「靡く」「嬌」「柔膚」「身」「寐」「ぬばたまの夜床」のイメージ的つながり、「玉垂」「玉裳」の「玉」のくりかえし、「朝露に 玉裳はひづち」「夕霧に 衣は沾れて」の対句的表現などに、波のくりかえす動きが、最後は「旅宿かもある」で一呼吸おくことで、結句「逢はぬ君ゆゑ」で音が強まり、意味が集約する。これを「朗朗として、振幅の大きい波動をおもはしめる」と言っていると考えられる。また、一云の場合も同様の「波動」と見られる。

### 卷二・二一〇の歌、

現身と 念ひし時に【一に云ふ、うつそみと思ひし】 取

持ちて 吾が二人見し ※「走+多」出の 堤に立てる

楓の木の こちごちの枝の 春の葉の茂きが如く 念へり

し 妹にはあれど 憑めりし 兒らにはあれど 世の中を

背きし得ねば かぎろひの 燃ゆる荒野に 白妙の 天領

巾隠り 鳥じもの 朝立いまして 入日なす 隠りにしか

ば 吾妹子が 形見に置ける みどり兒の 乞ひ泣く毎に

取り與ふ 物し無ければ 男じもの 腋ばさみ持ち 吾妹

子と 二人吾が宿し 枕づく 嬌屋の内に 晝はも うら

さび暮し 夜はも 息づき明かし 嘆けども せむすべ知

らに 戀ふれども 逢ふ因を無み 大鳥の 羽易の山に

わが戀ふる 妹は坐すと 人の言へば 石根さくみて な

づみ來し 吉けくもぞなき 現身と 念ひし妹が 玉かぎ

る ほのかにだにも 見えぬ思へば (※訓、斎藤茂吉)

この歌に対しても茂吉は次のように言う。

そして、もつと素朴に歌へば、破調にしたりしてぼつりぼ

つりと歌ふところを、人麿の創造した連續的波動的聲調を

以て歌ひあげてゐるのが、獨創だからいいので、そこで自

然澁味もこもり、輕薄に亙つて行かない點が必ず存じてゐ

るに相違ないのである。

ここに「人麿の創造した連續的波動的聲調」と言っている。

歌を見ると、初句「現身と」の「と」「念ひし時」の「と」「取

り持ち」の「と」のくりかえしがある。一云の場合も「と」の

働きは同様である。また「走出の堤に立てる 榎の木のこちごちの枝の 春の葉の茂きが如く」の「の」の連続のあと、「念へりし 妹にはあれど」「憑めりし 兒らにはあれど」の対句の「ど」が二度の小休止となっている。その後「世の中を背きし得ねば かぎろひの 燃ゆる荒野に 白妙の」に「の」の連続に長い間がある。また「天領巾隠り・・」以下は「amahirefuri」「tori」「irini」「kakuri」と「ri」の繰り返し、それらを含む句は「の」「て」「は」というつなぎの言葉によって巧みに運ばれる。「吾妹子」の「wagi」「腋ばつみ」の「waki」「吾が」の「wa」の近似の音の連続、「形見」の「み」と「みどり児」の「み」、「みどり児」の「い」と「毎」の「い」、「物しなければ」と「男じもの」の「もの」、「枕づく」の「づ」と「孀屋」の「つ」と、短い音の連続でつなぎ、「晝はも うらさび暮し」「夜はも 息づき明かし」の「はも」のくりかえし、「嘆けども せむすべ知らに」「戀ふれども 逢ふ因を無み」の「ども」のくりかえし、「大鳥の 羽易の山に」の「の」のくりかえし、「羽易」「haga」「わが」「waga」の「ga」の近似の音のくりかえし、「妹」「imo」「坐す」「imasu」の「im」近似の音のくりかえし、「坐すと」の「と」と「人」の「と」、「さくみて」の「み」と「なづみ」の「み」と、つぎつぎと同音で句がつながり、最後に「念ひし妹が」の後の間によって、結句「見えぬ思へば」

近代に発明された万葉集の声調様式「波動」(田中)

に音と意味が集約される。茂吉はこれを「破調にしたりしてはつりぼつりと歌ふところを、人麿の創造した連続的波動的聲調を以て歌ひあげてゐるのが、獨創だからいい」というのである。一般的に「波動」は、波紋のような小さな波の動きを連想しがちであるが、茂吉は長歌の構成の中では、特にスケールの大きな波のありかたを思い浮かべていたと見られる。

こうした茂吉の「波動」は、一面では江戸時代の歌格研究の影響をうけているとみられる。茂吉は、橘守部の『長歌選格』などに学んで「波動」を分析、図解する試みをおこなっているが、それについては別稿に述べたいと思う。また茂吉は、短歌の声調にも「波動」を言っているが、それについても別稿に述べたい。

## 六、おわりに

斎藤茂吉は、万葉歌の声調を捉えようとするなかで、柿本人麻呂の歌の美に代表される声調の様式として、「波動」を見いだした。それは物理学の「波動」の現象を比喩的に用いたものであった。具体的には、音の連続や対句により生じる繰り返しの旋律をいい、時折配される塞きのような終止形(完了の助動詞)で場面展開し、省略によって言外に意を含ませることで響

きが高鳴り、最後はうねりとなって結句に意味を集約してゆくところにうまれる表現効果を捉えたものと見得る。

なお、付言すると、「波動」は後に茂吉の弟子である佐藤佐太郎により茂吉自身の短歌の評語に用いられる。佐藤佐太郎は茂吉の

夕霧のたちのまに石だたみの歩道は濡れて長し夜ごろは  
（『白桃』）  
という歌について、

「たちのまにまに石だたみの歩道は濡れて」あたりの、息が長く波動的な歌調が何ともいえずいい。

佐藤佐太郎著『茂吉秀歌』  
と言っている。この歌は佐藤佐太郎のたちあげた結社「歩道短歌会」の名称の由来と思われるが、初句から二句三句四句へと同音のくりかえしに意味が微妙にずれながら進み、四句で切れ、結句「長し夜ごろは」は飛躍とともに詠嘆となっている。ここに万葉集の一三二番歌が、同音繰り返しの多い長大な前置きより、やがてそれが妹という一点に集約されてゆくありかた、また結句の「妹が門見む」と「靡けこの山」の間に飛躍があり、破壊的な力のあることが思い出される。茂吉の歩道の歌は短歌ではあるが、一三二番歌と類似の様式「波動」と認められたと見られる。「波動」をもつ歌の構成は、茂吉が理想とし

た万葉歌の様式のひとつであり、佐太郎にとっては師の歌そのものであった。

※万葉集本文は、伊藤左千夫、島木赤彦、斎藤茂吉のそれぞれの解釈、表記に従った。

#### 注

（注1）「声調」とは、古くより雅楽の用語であったが、明治以降に短歌にも転用された。

（注2）斎藤茂吉の声調論

斎藤茂吉「万葉短歌声調論」『斎藤茂吉全集』十三卷 岩波書店 一九七五年二月 三〇一頁

斎藤茂吉「短歌声調論」『斎藤茂吉全集』十三卷 岩波書店 一九七五年二月 一一六頁

斎藤茂吉「短歌における四三調の結句」『斎藤茂吉全集』十一卷 岩波書店 一九七四年三月 一頁

斎藤茂吉「作歌参考上の万葉講義」『斎藤茂吉全集』十三卷 岩波書店 一九七五年 五一—四頁

斎藤茂吉「人麿短歌の声調」『斎藤茂吉全集』「文学」一九四〇年 八頁

斎藤茂吉「防人の歌の声調」『文学』一九四二年 三頁  
（注3）

斎藤茂吉『柿本人麿（総論篇）』（岩波書店、一九三四年十一月）『斎藤茂吉全集第』十五卷 岩波書店一九七三年七月

斎藤茂吉『柿本人麿（鴨山考補注篇）』（岩波書店、一九三五年十月）『斎藤茂吉全集第』十五卷 岩波書店一九七三年七月

斎藤茂吉『柿本人麿（評釈篇卷之上）』（岩波書店、一九三七年五月）『斎藤茂吉全集第』十六卷 岩波書店一九七四年一月

斎藤茂吉『万葉秀歌（上下）』（岩波新書、一九三八年十一月）『斎藤茂吉全集第』二十二卷 岩波書店一九七三年九月

斎藤茂吉『柿本人麿（評釈篇卷之下）』（岩波書店、一九三九年二月）『斎藤茂吉全集第』十七卷 岩波書店一九七四年七月

斎藤茂吉『柿本人麿（雑纂篇）』（岩波書店、一九四〇年十二月）『斎藤茂吉全集第』十八卷 岩波書店一九七五年四月

（注4）

吉水千之「万葉集の音韻声調の研究―長歌に於ける母韻

分布に就いて―」『文学』一九三五年 十九頁

近代に發明された万葉集の声調様式「波動」（田中）

吉水千之「万葉声調試論―人麿、赤人、憶良の韻律研究―」『国語と国文学』一九三五年 二十八頁

吉水千之「万葉声調の分析的研究―長句字余（三分節構成）に於る純母音に關する一研究―」『国語国文学』一九三六年 二十五頁

藤森朋男「万葉集の歌と声調」『文学』一九三九年 二頁  
柴生田稔「万葉集に於ける短歌声調の変遷」『国語と国文学』一九四〇年 二十一頁

北住敏夫「斎藤茂吉の声調」『国文学解釈と鑑賞』一九五〇年 六頁  
岡崎義恵「人麿の長歌と短歌―特に短歌の声調について―」『萬葉』一九五七年 十二頁

五味保義「声調」という言葉「アララギ」一九六三年 五頁  
山口正「万葉修辭研究史における「声調」の問題」『茨城

大学文理紀要』一九六三年 十三頁  
新垣幸得「初期万葉の声調について」『特殊研究』『国文学』一九六八年 七頁

窪田章一郎「和歌の声調」『和歌文学講座』一九六九年 二十二頁

高嶋健一「茂吉の声調についての一、二の考察」『熊谷武

至教授古稀記念国語国文学論集」一九七七年 十二頁

伊丹末雄『齋藤茂吉の短歌声調観——万葉歌の訓み方を手がかりに』「大阪青山短大国文」一九九〇年 九頁

西条勉『人麻呂歌の声調と文体』「専修国文」二〇〇六年

二十頁 一〜二十

村田右富実「カイニ乗検定を用いた万葉短歌の声調の分

析」『万葉』二〇〇九年 九頁

品田悦一『万葉集の発明——国民国家と文化装置としての古典』(新曜社二〇〇一)

品田悦一『齋藤茂吉——あかあかと一本の道とほりたり』

(ミネルヴァ二〇一〇)

品田悦一『万葉語の近代——齋藤茂吉の言語感覚とその形

成』『古典日本語の世界』東京大学出版界二〇一一

二十四頁二三三〜二五六

品田悦一『齋藤茂吉異形の短歌』新潮選書二〇一四

(注5) 平安末期の漢詩集「本朝無題詩」のなかにも「波動」

が見える。この「波動」は、呉江の波の動きである。

(注6) 川本幸民訳『氣海觀瀾廣義』三都書林 一八七五

(注7) 片山淳吉『物理階梯』文部省編纂 一八七四年四月

(注8) 内田成道訳『小学物理学』文部省 一八七四年四月

上巻四十九頁

(注9) フリードリッヒ・シュドレル原著、中川重麗訳『萬有

七科理学』京都府師範学校 一八七七年 卷之一目録二

卷之六

波動論

二波成平 反射 屈折

固立顫動 波及顫動 結節線

氣波

(注10) カッケンボス・ガノー原著、宇田川準一訳『改正物理

全志』煙雨楼刊 一八七九年三月 三七五頁

※卷之七「光学」の項には、「光の性質及び其根元」として、

「波動」はなく、波及」という言葉がつぎのように見

える。

「先ノ性質ヲ論説スルニ熱ト同クニ説アリ曰ク発射説曰

ク波及説是ナリ(中略)波及説ニ從テ之ヲ論センニ光ハ

発光体ノ振動ニ起因スル者ニシテ「イーセル」前出ノ之

ヲ眼ニ伝ヘテ視覚ヲ起サシムルヤ猶空氣ノ音聲ヲ耳ニ送

テ聴感ヲ生セシムルガ如シ」

(注11) 飯盛挺造訳『物理学』一八七九年 中篇 一頁

目次 波動総論

「凡ソ波動状ノ運動ヲ區別シテ二ト為ス曰ク一處ニ定住ス

ル所ノ波動曰ク進行スル所ノ波動是ナリ」

(注12) 小宮山弘道訳『近世二大發明伝話機蘇言機』 弘文社

一八八〇年 三十六頁

電話機、蘇言機（蓄音機）の音の波動として

「果シテレイス氏ナルコト論ヲ竣（ま）タズ而シテ實ニ氏ハ聲音ノ波動ヲシテ電氣ノ波動ニ變ゼシメ以テ通伝ノ作用ヲナサシメタリ」

(注13) パルフォール・ステウアート原著、川本清一訳『士都華氏物理学』東京大学理学部 一八七九年 二四三頁

第四篇 第十七課 波動

第三百十條

並ニ先擺動ノ理ヲ詳説セントスルノ意ハ蓋之ヲ以テ聲音ノ理ヲ解スルノ階梯ト為スニアリ

(注14) 菊池熊太郎『普通物理学』 金港堂 一八九二年

三四八頁

「第四篇 第六章 波動説ノ真相——光の分極」として、

波動説と発射説を紹介している。

「波動説ノ価値。古来光ノ本性ニ関シテハ二種ノ説アリ、其ノ一ハ発射説ニシテ、他ノ一ハ波動説ナリ、発射説ニ由レバ光ヲ一種ノ物質ト見做シ、此ノ物質光体ヨリ發射スルモノトナス、然レドモ今日ノ理学者ハ皆波動説ヲ採用スルニ至レリ是レ波動説ハ最善ク光ノ現象ヲ解明スル

近代に發明された万葉集の声調様式「波動」(田中)

ニ足ルヲ以テナリ」

この著者・菊池熊太郎はほかに、『物理学』（金港堂一八九三年）、『物理学教科書』（金港堂一八九七年）にもまったく同じことをしている。

(注15) アルフレッド・ダニエル著、木村駿吉訳『物理学原論』内田老鶴圃 一八九三年

(注16) 鳥久太郎編『近世物理学』下巻 雄山閣・春陽堂 一八九四年 三五九頁

第五編「第一章 光」には「放射説及び波動説」

波動説に於ては物体間と空間とを問はず凡て宇宙はエーテルと名つくる物を以て充たされ発光体分子の運動此エーテルに伝はり之に波動を起さしめ以て視官を刺激するなり

第五編「第九章波動説」

三九一 光と音響との比較 光はエーテルの波動に

よることは既に之を記せり、今之を音響に比較せん、音響も波動なれども其波動は空気分子等の波動なり、音響波動の媒介物（空気等）の現存は吾人實際之を知ると雖も光線波動の媒介物（エーテル）の現存は吾人未た之を確知せず

(注17) 佐藤為次郎編『医学生受験用 物理学』 吐鳳堂

一八九七年 八十五頁

第五 波動

(一) 水ノ波動ヲ伝達スル原因及波動ノ定則ヲ記セヨ

波動ノ定義 物體分子外力ノタメニ一往一來ノ運動ヲ起シ漸々相順列スル所ノ諸分子ニ伝達スルトキハ之ヲ波動ト云フ

波動現象ノ原因 水中ニ於ケル波動ハ物體ノ落下ニ由テ起ルモノニシテ

(注18) 矢田部良吉『新体詩抄』 丸屋善七 一八八二年 序

文

(注19) 北村門太郎(透谷) 『エマルソン』 民友社 十二

文豪シリーズ第六卷 一八九四年 六十七頁 L, 6

(注20) 久米邦武『特命全權大使米欧回覽實記』 博聞堂 一

八七九年

(注21) 森鷗外『キタ・セクスアリス』 「昂」一九〇九年

七月

「そのうえ、丁度空気の受けた波動が、空間の隔たるに従つて微かになるように、この心理上の変動も、時間の立つに従つて薄らいだ。」

(注22) 夏目漱石『吾輩は猫である』「ホトトギス」一九〇五

年一月

「吾輩がこの際武右衛門君と、主人と、細君及雪江嬢を面白がるのは、単に外部の事件が鉢合せをして、その鉢合せが波動を乙なところに伝えるからではない。」

(注23) 夏目漱石『幻影の盾』 「ホトトギス」一九〇五年

四月

「見る間に次へ次へと波動が伝わる様にもある。動く度に舌の摩れ合う音でもあろう微かな声が出る」

(注24) 森鷗外『仮名遣意見』「臨時假名遣調査委員會議事速

記録」一九〇九年一月

「又近世復古運動が起りましたも、此波動は餘り廣くは世間に及んで居ないに違ひない。」

(注25) 森鷗外『カズイスチカ』「三田文学」一九一一年二月

「ええ。波動はありません。既往症を聞いて見ても、肝臓に何か来そうな、取り留めた事実もないのです。酒はどうかと云うと、厭ではないと云います。はてなと思つて好く聞いて見ると、飲んで二三杯だと云うのですから、まさか肝臓に変化を来す程のこともないだろうと思ひます。栄養は中等です。悪性腫瘍らしい処は少しもありません」

(注26) 今井邦子『萬葉集講座』第一卷(作者研究編)「額田

女王研究」 春陽堂 一九三三年二月

此歌の如き内容の場合大抵の人は初句より絶叫的語調を以て起し來るが普通であるのに第一句に枕詞をおき、第三句に枕詞をおき第一句より第四句までに二句の枕詞を使用したる爲に、初め四句は如何にも悠揚たる語調になつて奔らんとする思ひを差控へて靜かにしてゐる趣がある。と、その調子の内容に觸れて言はれた言葉のなかに、歌人は深く學ぶ處があると思ふ。しかも三の句で「三輪山の」と急呼せず「三輪の山」とのの一言を挿入した爲に語調を莊重にしそれが五句以下の激情を切つて落した瀧の様な烈しい波動をいたづらに騒がしくせずに一層力強いものに響かせてくるといふ様な點に左千夫は深く留意してゐるのにも教へられる。

(注27) 島木赤彦『萬葉集の鑑賞及び其批評』(アララギ叢書第二十一編) 岩波書店 一九二一年十一月 講談社学術文庫 一九七八年二月

(注28) 島木赤彦『歌道小見』(アララギ叢書第16編) 岩波書店 一九二四年六月

(注29) 茂吉は、仏典のくりかえしの例として『仏説阿弥陀經』をつぎのようになげている。

成就如是 功德莊嚴  
成就如是 功德莊嚴

近代に發明された万葉集の声調様式「波動」(田中)

成就如是 功德莊嚴  
福德因縁 得生彼国  
应当發願 生彼国土  
一切諸仏 所護念經  
一切諸仏 所護念經  
一切諸仏 所護念經  
(注30) 島木赤彦『萬葉集の鑑賞及び其批評』27「三輪山を然も隠すか雲だにも情あらなむ隠さふべしや」の調子について言つた語。

(たなか のりこ・近畿大学非常勤講師)